

文化講座 初等教育学科「特殊研究講座」(平成 27 年度)

平成 27 年 9 月 30 日 (水)

つくることとみること

東京藝術大学美術学部教授 木津 文哉氏

人間社会学部研究会 (平成 27 年度) 要旨 (初等教育学科関連)

平成 28 年 2 月 3 日

日本画の景色観としての盆景性—その振じれと可能性—

専任講師 早川 陽

私は日本画の絵画技法を基礎に置き、主に景色をモチーフに制作している。今回の研究の出発点は制作者の基本概念として設定する「日本画とは何か」という出自への問いかけが根底にある。そして学部入学当時から大学院美術教育研究室に至るまで考察を続けた「制作者である私が、作品を取り巻く社会的な枠組みをどう見ているのか」を相関図として示した。下図 1, 2 は景色を切り口に方向性をまとめた概念図である。

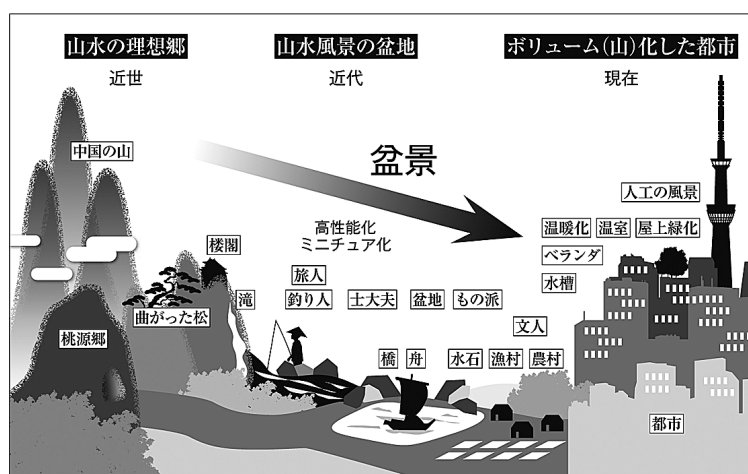


図 1 山水の理想郷・山水風景の盆地・ボリューム(山)化した都市

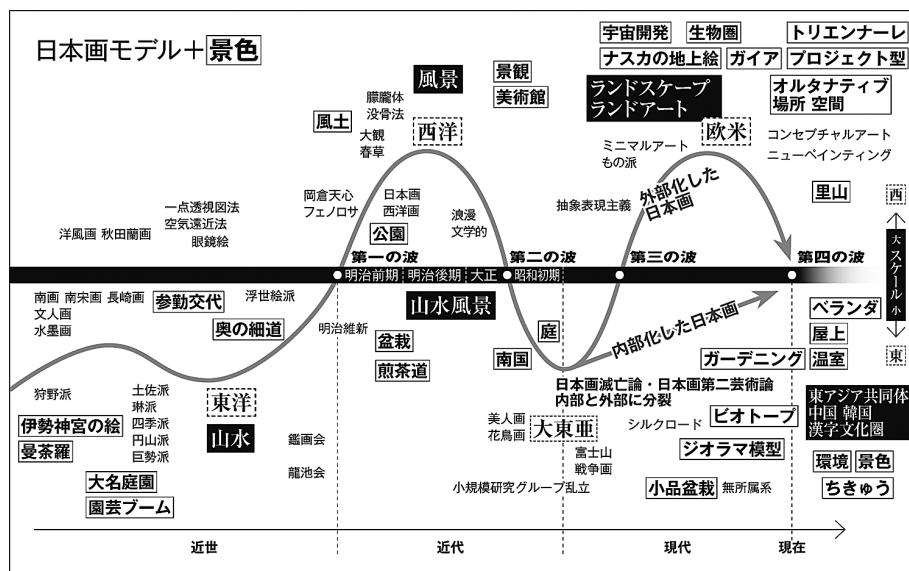


図 2 日本画モデル+景色

実際の技法を学ぶ様々な経験を通して、広義の日本画そのものの探求よりも、日本画で描かれる景色に基点を置くことで、景色は時代や文化によって変わるものであると実感するようになった。そして日本画の経験を通して場所を読み、景色を見る意味を考えることで出自を明らかにしたいと考えた。そのことで「制作者が場所をどう読むのか」という問題意識と、「日本画でどのような景色を描くのか」という自らの制作の方向性を見出し、景色を総体としてつなげる必要があった。

同時に私は明治期に美術から切り離された文化としての景色(山水性のある自然)を嗜好し、教育の現場では過去の絵画の景色観に触れるための美術カリキュラムを実践してきた。ここでも「文化としての景色とは何か」

「景色観の教育とは何か」を同じ問題意識から考えている。絵の中の空間設定と、人々の生きる教育の場や文化としての景色は、選ばれて変わるものであり、一見すると分かれて見えるこの変化の経験には関連性がある。

景色は一般に人々が認識する目に見える物理的な世界であると同時に、画家によって絵画の制作対象とされる、主体的な一つの表現世界として存在している。制作者として景色を作品化する際には、過去の画家の眼差しを絵画の意味として読み込み、今必要な世界観を再構築する必要がある。私は美術の「観る」とことと日常的に接することで、近代絵画としての日本画の景色と、盆景文化や美術教育の場にある景色とを取り巻く全体の動きがあることに気がついた。

たとえば近代絵画としての日本画には山水画と風景画の「揺れ」があり、盆景性が特徴として現れている。初期の日本画の目的は、山水景をひとまとめにして東アジアの文脈を断ち切り、欧米の遠近法を風景の捉え方として引き込むことにあった。近代化による影響を要因として再構築された景色は、山水景を合理的に処理して風景化すること、さらに、型としての自然概念から測定可能な環境に視点を置き換える試みの記録と言える。このように景色は時代の方向性や文化的な影響によって必要とされる眼差しが容易に変化する不確定な流動性を持つ。

本論は、「日本画の山水・風景の景色」から「日本画の特徴としての盆景性」を導き出し、「盆景文化を通して景色をみる」、「景色観が空間の設定にかかわること」、「美術教育の場に景色観を見出すこと」として日本の近代以降の景色観の成り立ちと方向性を考察する。それらの複合的な景色は、「日本画の景色モデル」と共通性を持ち、「総体としての“景”」という全体をつなぐ構造や関係性を明らかにすることができる。このことから現代において景を構造化し、環境全体としての景を捉える複合的な視野を獲得する可能性を示した。

オギュスタン・ベルクは著書『風土としての地球』に「Trajection（通態化）」と、動きのある景色概念を捉えようと定義している。ここに示されている「通態化」は「風土性を生み出す、主観的なものと客観的なもの、物理的なものと現象的なもの、生態学的なものとの風土＝歴史的な結合過程」であり、「派生語に、通態性、通態的、通態する」として使用されるという。ベルクは風景の荒廃の原因として、風土のおもむきの喪失、すなわち「近代性が化学・道徳・芸術という三つの世界を分離させてしまったこと」にあると指摘した。

景色は芸術の試みによって意識的に取捨選択されてきた。過去には過去の景色があり、現代には現代の景色がある。また、子どもに見える景色があり、大人に見える景色も存在する。これらの複合的な景色は歴史的な流れの結合過程によって俯瞰される。そこで「総体としての景」や「通態化」概念を日本画の景色観に応用し、幾つかの美術を巡る状況から全体像を俯瞰することで、景色表現の大きな振じれを見ることが可能になった。このことから現代の問題としてポストモダン以降の景色の構造を明らかにし、景色の方法論や状況、環境のあり方を考察、最終的に景色を通した教育の可能性や現代の日本画の可能性として“景”を論じることを目指した。



図3 早川陽『山水風景、或は盆景』2010年 紙本彩色 181.0×432.0 cm

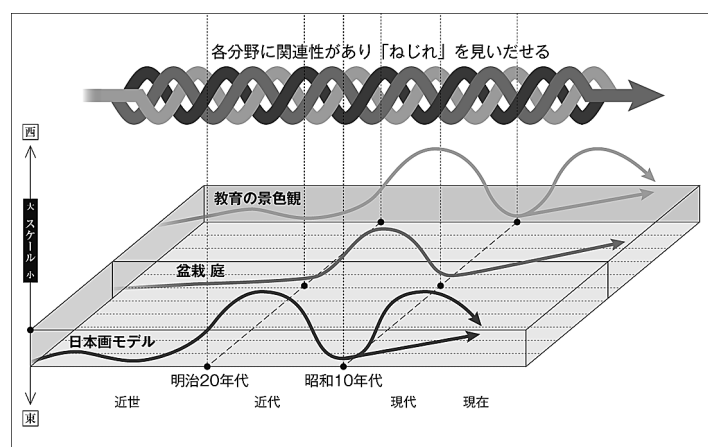


図4 盆景性の振じれ関係図

図出典: 早川陽『藝術と環境のねじれ—日本画の景色観としての盆景性』(清水弘文堂書房 2013)